

蒲生慶一さんのこと

齋藤 純一
SAITO Junichi

早稲田大学政治経済学部
Waseda University, School of Political Science and Economics

Quadrante, No.24 (2022), p.29.

蒲生慶一さんとは、1988年に私が横浜国立大学経済学部にて勤めて間もなくの頃に出会った。社会思想史の授業を通じてである。

その頃は、マキアヴェッリから始めてヘーゲルを経てウェーバーに至るオーソドックスな授業の構成だったと記憶している。とはいえ、社会思想史の授業でありながら、マルクスは取り上げなかった。高島光郎先生の経済学史の授業がミルとマルクスを中心とするものだったという事情もあるが、当時の経済学部は佐藤金三郎先生や岸本重陳先生など錚々たるマルクス研究者を擁しており、はばかりの気持ちが強かったからである。経済学部のスタッフは近経、非近経（マル経や歴史・思想史）そして法律関係のいずれかに分かれていた（私が属していたのは非近経のグループである）。

蒲生さんは、マル経と近経が併存し、しかも拮抗していた、かなりユニークな環境で経済学を学んだ。蒲生さんは、私の拙い授業を目を輝かせて聞いてくれた数少ない受講生のひとりである。彼の隣にいつも座っていたもうひとりの学生のお名前は失念してしまった（お顔は鮮明に思い出せる）。この二人は授業の後よく質問してくれ、それが私にとって励みになった。

当時の経済学部は、複数のゼミに参加する学生が多く、学問的な活気に充ちていた（蒲生さんよりも少し後のことになるが、北海道大学の橋本努さんは鬼塚雄丞ゼミから、琉球大学の鳥山淳さんは岸本ゼミから私のゼミに参加し

た）。記憶が定かではないが、蒲生さんは、佐藤先生が89年に急逝されたために、国際金融論の上川孝夫先生のゼミに移ったのではないかとと思われる（あるいはお二人のゼミにもともと参加していたのかもしれない）。

経済学部で学問・研究への関心をかき立てられた学生は、当時修士課程しかなかった横浜国大の大学院ではなく、東大ないし一橋の大学院を受験して、進学することが多かった。教員にもそういう途を辿ったひとが少なくなかった。廊下での立ち話だったが、大学院に進んで勉強を続けることにした、一橋を受けることにしたというお話を蒲生さんから聞いた覚えがある。その後、東京外国語大学に職を得たというお話を蒲生さんご本人からもうかがったが、これはすでにご就職後のことだったかもしれない。

私の記憶にのこる蒲生さんは、本当に目を輝かせて学問への好奇心を示す、意欲溢れる学生である。彼のことを思い出すと、あの頃の横浜国大経済学部の活気も思い出される。

